

今 井 福 治 郎

ユリは万葉集中に、サユリ・サユリバナ・サユリノハナ・サユルノハナ・ユリノハナカヅラ・クサフカユリ・ヒメユリと詠まれてゐる。

佐由利・左由利花

(一) ……情なぐさに 瞿麦を 屋戸に蒔き生し 夏の野の 佐由利引  
き植ゑて 咲く花を 出で見る毎に 瞿麦が その花妻に 左由  
利花 後も逢はむと…… (十八の四一一二)

佐由利婆奈

(二) 燈火の光に明ゆる佐由利婆奈後も逢はむと思ひ初めてき

(十八の四〇八七)

佐由利波奈

(三) 佐由利波奈後も逢はむと思へこそ今のまさかも愛しみすれ

(十八の四〇八八)

佐由理花

(四) 吾妹子が家の垣内の佐由理花後と云へるはいなとふに似る

(八の一五〇三)

佐由利花

(五) 佐由利花後も逢はむと下延ふる心しなくば今日も経めやも

(十八の四一一五)

佐由利能波奈

(六) あぶら火の光に見ゆるわか蘊佐由利能波奈の笑まはしきかも

(十八の四〇八六)

(七) ……歎きつつ 我が待つ君が 事畢り 帰り罷りて 夏の野の  
佐由利能波奈の 花咲みに にふぶに笑みて 逢はしたる……

(十八の四一一六)

佐由流能波奈

(八) 筑流嶺の佐由流能波奈の夜床にも愛しけ妹ぞ昼もかなしけ

(二十の四三六九)

ユリノハナカヅラ

(九) 時に主人、百合の花蘊三枚を造り、豆器に畳ね置きて、賓客に  
捧げて贈る。

(十八の四〇八六—四〇八八の題詞)

草深由利

(一〇) 道の辺の草深由利の花咲みに咲まししからに妻といふべしや

(七の二二五七)

草深百合

(一一) 路の辺の草深百合の後といふ妹が命を我知らめやも

(十一の二四六七)

姫由理

(一二) 夏の野の繁みに咲ける姫由理の知らえぬ恋は苦しきものぞ

(八の一五〇〇)

以上の諸例で最も多いのは、サユリである。サユリのサは、早、狭、五月の略ツツキとする諸説または、接頭語の愛称とする説(全註釈)などがあるが、五月説が穩当である。サが田の神の意であることは既に証明されてゐる。つまり、田の神を迎へて田植をする頃に咲く花が、サユリ花であつて、今の山百合である。ヒメユリは、ユリの一種である。万葉草木考、三は、「処々山中に自生し、人家亦多く栽ゆ、産地によつて大小あり、大者高二尺余、小者一尺余、葉コオニユリの如くして小、散布してヤマユリの密通なるが如くならず、梢上分又直立数花を開く。瓣狭して開展反卷せず。色黄赤の二種又瓣内に細点有無等あり」と、詳しく述べてゐる。また、ヒメに可憐とか、形の小さい意とする説もあるが、集中に残るヒメには、その意に該当する確かな例はない。しかしヒメユリには、その意を感じてゐたらしい。山百合の白色の花に對し、朱または、黄の花色を持つのがヒメユリである。このやうにヒメユリの実体が判つてくると、(三)の歌が、大伴坂上の郎女といふ作者名を題詞に得なくても、いかにも女らしい感觸の歌であり、譬喩であることがわかる。ユリはヒメユリに限らず女性に譬へられ、相聞風の素材になつてゐることは、前例の歌を見ても知ることが出来る。

正倉院御物の幡身刺繡にユリの花のあるのは、当代人のこれに對する嗜好と信仰とを知る一端である。しかし、ユリの花の香を詠んだ歌のない理由は、どのやうに考へたならばよいのであるろう。元來、集中にはかをりを詠んだ歌は非常に尠い。

高松のこの峯もせに笠立ちてみち盛りたる秋の香のよき

(十の二三三三)

の香は、茸のかをりを詠んだ歌で、花を詠んだものとしては、次の二首である。

橘のにはへる香かも霍公鳥鳴く夜の雨にうつるひぬらむ

(十七の三九一六)

梅の花香をかぐはしみ遠けども心もしのに君をしぞ思ふ

(二十の四五〇〇)

の、橘の花と梅の花との香を詠んだものである。香に關係のあるニホフにしても、集中では美しく映発する意と染める意とに使はれてゐる。前例の三九一六番のニホフにしても、かをりの意ではなく映く意である。つまり万葉人は、花を嗅覺關係ではなく、視覺關係で捉へたのである。古代人の美意識を窺ふ一面である。

次にユリの語原であるが、これは難解である。(一)サユリのサの省かれた語。(二)動・緩・縦などの意。(三)地下の鱗茎がより合つてゐるユリの軀。などの諸説があるが、(四)説に關係があらう。「京都古習志」に、「京都府愛宕郡岩倉村(京都市右京区)の石座神社の祭に、神饌を入れて頭に載せて運ぶユリワはユリワともいひ、径二尺深さ五寸くらゐの鹽風の黒色の塗物で、蒔絵がある村持ちの祭器である」といふ一節がある。この中のユリワ・ユリワンが、ユリの語原を探る上の手懸りとなる。長野県伊那郡辰野町北大出のユリワは午餉を運ぶ盤台で、これを頭に載せ、汁つぎ桶を片手に持つて行くのは、田植の日ばかりでなく常の日にもする。「深川集」の曾良の句にも、「駿河の田植ゆり輪いたく」とあつて、田植の日の食物をこれに入れる風が残つてゐる。香川県小豆郡豊島の家浦のユリワは、直径二尺ばかり深さ五寸の木地鉢であるが、これは晴の日の食物運搬具で、平常はしまつておく。ユリワは、ユリ・ユリゴ・ユリダイ・ユリノコなどと呼んでゐる地方も多いが、その用途は大体同一で、それを手に持つこともあるが、頭にかづく地方が多い。頭に載せるのが、ユリの語群の性格、つまり、神聖に扱はれてゐる原意を示してゐる。京都府相楽郡加茂町銭司の、十月十五日の祭に使ふ

円形の曲物をユリダイと呼び、これにお供へと柳箸を入れて、宮座から十三才未満の少女が頭にいただくのは(京都古習志)、ユリの原意を示す端的な例である。杵岐・対馬でもユリカンメと云つて、祭の日にはこれに、供物を入れて女がかづく。このやうにユリは、物を入れて運び器に使はれてゐるが、これは同時に神霊を招く具であつた。陰陽師の呪法にはこれに供物を盛つて祭壇にしたり、ユリを伏せた上に弓を置き、弦を鳴らして呪文を呪へるのは(「方言」六の一・「杵岐島方言集」)、その意である。ユリの名の起りは、選りわけ、揺りわけの意と思はれる。岡山県阿哲郡上刑部(大佐町)のユリは、米と粳、スクモを選りわける板盤である。「伊勢浜菰三」にも、ユリは農家で稲などを磨りおとして動揺させる道具で、正月の餅をこの器に入れ、鏡餅などを他家に贈るにも使ふと記してゐる。長崎県島原地方、奄美群島の徳の島、八重山群島の石垣島では、篩のことをユリと云つてゐる。(「口承文芸」二)。つまりユリは、神霊を揺り出す、選り出す、招く意で、それはやがて神座を意味することになる。徳島県三好地方に伝はる百合子姫伝説が、山で掘つて来た百合根の中から出て来たことに、その発端がなつてゐるのは、暗示する点が多い。北九州・山陽地方に多く伝はる百合若伝説も、この原意を探る上に参考になる。百合若のユリは、杵岐のイチヂヨと呼ぶ巫女が、ユリ(曲物)を前にして百合若説経を語ることにあるとする説がある。しかしまた一方、これを疑ふ説もあるが、如上の諸例からして神霊を揺り動かす、招いて語る説経と解するのがよい。山口県豊浦の吉見在では、四十二才の年に生れた子には、必ず百合神・百合子などのユリの名をつけるのは(「民間伝承」一六の五)、神の加護によつて除疫することにある。前例(台)の「草深由利」・「草深百合」は、草の深い所に咲くユリであるが、思ひも寄らない所に咲く白い花を見て、万葉人は祈りと占ひとを花から揺り出

したに違ひない。両首の歌がそれを適切に表はしてゐる。

この事情は更に、次のユリの花蘊によつて知ることが出来る。

同じ月九日、諸僚、省秦の伊美吉石竹の館に集ひて飲宴しき、時に主人、百合の花蘊三枚を造り、豆器に置お置き、賓客に捧げ贈る。各この蘊を賦して作れる三首

あぶら火の光に見ゆるわが蘊さ百合の花の笑まはしきかも

(十八の四〇八六)

右の一首は、守大伴宿祿家持

燈火の火に見ゆるさ百合花後も逢はむと思ひそめてき

(十八の四〇八七)

右の一首は、介内蔵伊美吉繩麻呂

さ百合花後も逢はむと思へこそ今のまさかも愛しみすれ

(十八の四〇八八)

右の一首は、大伴宿祿家持、和ふる

これら一群の歌の題詞、「同じ月九日」は、前の歌(十八の四〇八五)の題詞、「天平感宝元年五月五日云々」からして、同年の五月九日である。皇極紀の

三年夏六月癸卯朔、大伴の馬飼の連、百合の華を献る。其の茎の長さ八尺、其の本異にして未遇へり。

の一節も示すやうに、五月、六月は、山百合の咲く時期である。ユリの名の起りについては前に述べたが、それに「百合」の字を当てた理由は未詳である。ユリの花の百重に重なつて咲く様から得た文字ではなからうか。鱗茎から得た名ではないだらう。「み熊野の浦の浜木綿百重なす」(四の四九六)からも暗示を得ることだ。更に伊美吉の題詞で、「百合を百合」としてゐる理由が、また未詳である。新撰字鏡に「百合二八月採根」とあるのは、「百合」の訓みを示すのであつて、その理由を示すのではない。ユリの花の白く重り合

ふ様から得たものではないだらうか。千葉県の東海岸九十九里浜に面して、「白里」といふ地名がある。九十九里は百里に一里不足なので、「白里」の名を得たものと伝えられてゐるが、それを「百合」と「百合」との関係に結ぶことは困難である。ユリの場合は伝説による名ではなく、叙景的表现によるからである。「百合花藪三枚」の「三枚」は仙覚本によるもので、「三枝」とある。「三枝」は、ユリの枝の形から得た表現で、「三枝」は、藪の数である。「藪を数へるのに何枝とはいはないだらう」とする全註釈の説もあるが、延喜式四時祭にもこれをヒラと訓んで、楯一枚・席二枚・短帖一枚・食薦二枚など、その用例は多い。いづれでも意味は通るが、今は仙覚本による。賓客が三人なので三枚（三本）作つたのである。一本の茎から岐れる三本の枝と花とで、藪をそれぞれ作つたのである。歌はその中の二人、家持と繩麻呂の作だけ残つてゐるが、他の一人の歌もあつたものと思はれる。四〇八八番の家持の歌は、繩麻呂の歌に対する返歌であることは、歌を見ても明瞭である。「豆器」は、万葉集草木考に詳しく述べられてゐるが、結局、礼器で、物を載せる器である。これに藪を載せたところに、藪の性格がある。

藪の性格については、今ここでくどくど述べる必要はない。伊美吉が百合の花藪を作つて賓客に贈つたのは、賓客を厚遇したのである。この場合、賓客がそれを纏いて舞つたものではなかつたらう。賓客は結局、そのもととはマラウドガミ（客神）なので、百合の花藪を捧げたのである。尚、この間の事情は、奈良市本子守町鎮座、率川神社の三枝祭（ゆりまつりとも云ふ）に見ることが出来る。率川は開化紀元年冬十月の条に、「都を春日の地に遷す。是を率川の宮と曰ふ」とある地である。三枝祭は毎年六月十七日に行はれる。神社は大神神社（奈良県桜井市三輪鎮座）の摂社、推古天皇の御代、

大三輪の君白堤が勅命によつてお祀りし、祭は文武天皇の大宝年間から行はれてゐると伝えられてゐる（率川御子守神社御本縁）。御祭神は、率川御子守神社御本縁（三輪叢書）に、

率川坐大神御子神社 一作伊謝川

在本子守坊 俗云子守

中殿姫踏躰五十鈴姫命

左殿玉櫛姫命 又名、三島溝檝姫号之母神

右殿狹井神 大己貴命之荒魂也

春日社司注進状曰、自御宝殿（春日大宮）一西十五町去坐率川明神所謂三枝明神是也、神祇令集解曰、伊謝川社即大神族類之神也、大神氏宗定而祭、不定者不祭。

とある。御子神を中心にして両神が両方から護つてゐるので子守明神、安産、育児の神として崇敬されてゐるのである。先づ、記紀の記録によつてこれら御祭神の縁由を考へてみよう。神代紀一書に、大己貴の神が出雲の国で海上から光り輝いて来た幸魂奇魂（大物主の大神）に問ひかけた段がある。

汝は此れ吾（大己貴の神）が幸魂奇魂なりけりと知りぬ。今何処にか住まむと思ふや。対へて曰はく、吾は日本の国三諸山に住まむと思ふと。故れ即ち宮を彼処につくりて、就きてましまさしむ。此れ大三輪の神なり。此の神の子は、即ち甘茂の君等、大三輪の君等、また姫踏躰五十鈴姫の命なり、また曰はく、事代主の神、八尋の熊鷹に化爲り、三島の溝檝姫に通ひたまひて（或は玉櫛姫と云ふ）、見姫踏躰五十鈴姫の命を生む。是を神日本磐余彦

火火出見の天皇の后となす。とある。これによると三輪の神は、大己貴の神の幸魂奇魂であることと、神武天皇の皇后五十鈴姫の命は大三輪の神の子であること（一説には、事代主の神と玉櫛姫との間の子）を知る。事代主の神は

また、

大國主の神、また神屋楯比売の命に娶ひて生みませる子、事代主の神（古事記、上）

とあるやうに、大己貴の神の子であるので、五十鈴姫の命は大己貴の神の系統であることが明らかである。神武紀庚申秋八月の条でも亦、

事代主の神、三島溝ミツノ腋耳の神の女玉櫛媛にみあひまして生める児、号を媛蹈躰五十鈴媛の命と曰す。是れかほ秀れたるひとなりと。天皇悦びたまふ。九月、壬午朔。乙巳、媛蹈躰五十鈴媛の命をめし入れて正妃としたまふ。

と、事代主と玉櫛姫との間の子にしてゐる。しかし、率川神社の縁起では、狹井の大神と玉櫛姫の命との間の子にしてゐるのである。

狹井の大神は、延喜式卷第九、神名上に見える、  
城上郡。狹井坐大神荒魂神社五座。

とある一座の神である。狹井神社は率川神社と同様に、大神神社の摂社である。御祭神は大神荒魂神（大己貴の神荒魂）・大物主の神・媛蹈躰五十鈴姫の命・勢夜多多良姫の命・事代主の神であるが、率川神社ではこの中の大己貴の神の荒魂を、狹井の大神にしてゐる。しかし、前述の記紀の所伝によると、この神が事代主の神に当ることになる。書紀の一書と神武紀によると、事代主の神を当てるのがよいことになる。率川神社の縁起は、延喜式の記載もあるが、書紀の一書の本文と、古事記神武天皇の御東征の段に伝へられてゐる神婚伝説に支へられてゐる。つまり、三輪の大物主の神が丹塗矢に化つてをとめを得た物語である。そしてその間に生れた子を、「富登多多良伊須岐比売の命、またの名は比売多多良伊須氣余理比売」と名づけてゐる。この比売は、書記所伝の五十鈴姫の命のことである。大物主の神については諸説があるが、大己貴の神に憑

りつゝいた幸魂奇魂である。大物主の神のオホモノが、偉大な靈威を持つ魂の意であることを考へても了解がつく。三輪地方で尊信されてゐた神靈であつたらう。それに大己貴の神の伝説が結びついたものと思はれる。今の大神神社の原初形態は、この伝説以前既に民間信仰の神として、人々の心に深く宿つてゐたものと思はれる。狹井は古事記神武天皇の段に、

ここに其の伊須氣余理比売の命の家、狹井河の上に在りき。天皇其の伊須氣余理比売許幸行でまして、一宿御寝ましき。「其の河を佐草河と謂ふ由は、其の河の辺に山由理草多かりき。故れ其の山由理草の名を取りて、佐草河と号けき。山由理草の本の名、佐草と云ひき」

とある。これにつづく伊須氣余理比売の命の歌にも、

さゝるがはよ雲たちわたりうねび山木の葉さやぎぬ風吹かむとすと、詠まれてゐる。狹井川は奈良県磯城郡誌に、「三輪山より発し、狹井社を遶り、箸中に至り巻向川に入る。俗に薬川と呼ぶ。狹井社の大神荒魂神は、疾疫を鎮遏するを掌る。其社辺を流るる水なるを以て之を飲めば、病を癒すと云ふ伝説に因れるならむ。」とあるが、今は川も瘦せてゐる。疾疫を鎮めると云ふ薬井戸は、神社の境内にあつて、酒造家、製菓業者が尊信し、その製剤に使はれてゐるが、このことと、狹井川を薬川と呼ぶことは、そのまま神社の性格を物語つてゐる。つまり、大物主の神（大國主の神）に縁由を求めてゐるのであつて、これは率川神社の縁起と同じである。これは云ひ換へると、ユリの靈威を物語つてゐる。前述の古事記の註、「山由理草の本の名、佐草と云ひき」は、佐草の原義を示し、狹井神社がユリ縁由の深いこと、そしてまた、率川神社の三枝祭に三輪山のユリを移して行はれる理由もおのづから理解することが出来る。佐草が山由理である理由は、この一節だけでは未詳と云ふべきである。

サキは、

珠衣の装束左圍しづみ家の妹にもいはず来て思ひかねつとも

(四の五〇三)

のサキサキに關係がないだらうか。サキサキはもの動揺してさばぐ意である。つまり前述のユリの原義と同意である。延喜式、卷第一、神祇一、四時祭上に、

三月の祭。鎮花祭二座。大神の社一座、狹井の社一座とあるが、それを令の義解、神祇令第六が、

季春、鎮花祭(謂ふ、大神・狹井の二つの祭なり。春の花飛散する時において、疫神分散して禍を行ふ。其の鎮過の為に必ず此の祭有り。故に鎮花と曰ふ)。

と、解釈を施してゐるのは、春の頃に行はれる鎮花祭の意を、端的に説明してあると云つてよい。毎年四月十日(もとは三月)、京都市北区雲野、今宮神社の境内社、疫神社で行はれるヤストラヒ祭もこれと同種である。大神・狹井の両社では、毎年四月十八日に行はれる。この日、神饗物として三輪山に自生する葦草のユリの根と忍冬とをお供へし、ひかげのかづらと忍冬とで飾つて、疫病除の御幣を参拝者に圍けるのは、鎮花祭の性格を明確にしてゐる。

三輪山の地を離れて遠く率川神社で行はれる三枝祭は、三輪の神の憑りますユリを移して行はれる神事である。つまり、ユリは移動神座である。神社では、光孝天皇の御代には助田を奉られ、醍醐天皇の御代には神祇官から幣物を祝につけて日を選んで行はれ、馬寮から神馬を献られたほど、当時は盛んに行はれた。しかし、後世になつて中絶してゐるが、明治十四年再び古式の祭儀に復興され、それが現在に及んでゐると伝へてゐる。延喜式卷第一、四時祭上に、

凡、踐時大嘗祭を大祀と爲し、祈年・月次・神嘗・新嘗・加茂等の祭を中祀と爲し、大忌・風神・鎮花・三枝・相嘗・鎮魂・鎮火

・道饗・御饗神・松尾・平野・春日・大原野等の祭を小祀と爲せ。凡、祈年祭は二月四日、大忌風神の祭は並四月・七月の四日、月次祭は六月・十二月の十一日、神嘗祭は九月十一日。其の子・午・卯・酉等の日の祭は、各本条に載せたり。自余の祭の日を定めざるものは、臨時に日を扱ひて祭れ。

とある。これによると、鎮花・三枝の両祭は小祀であり、「臨時に日を扱ひて祭る」部にはいるが、同条の同条に、次の記載がある。

四月の祭

三枝の祭三座(率川の社)

箱一疋、糸一匁一兩、綿五兩、五色の薄紙各一丈二尺、倭文三尺、調布二端二尺、麻布五反、木綿・麻各十斤、桌六兩、弓三張、篋一連、羽一翼、鹿角一頭、鉄三斤五兩、酒の料の額一百束、(神饗)榎二斤、鰻魚四斤、鰯六斤、海苔四斤、塩一升五合、鹽・水盆・都徳波・區・短女杯・鹽各三口、杯十五口。

右、三社の幣物は、前の件に依り、祝等に付けて祭に供へしめ



花の百合



特殊神額を神前に供へる

とあるが、「三社」は、大神の社、狹井の社、串川の社を意味する。今の義解はこの祭の次第を、孟夏、三枝祭、謂ふ、串川の社の祭なり。三枝の花を以て、酒樽に飾りて祭る。故に三枝と曰ふ。と、註してある。現在の三枝祭は、義解の註を本体として行はれてゐるが、孟夏（田四月）でなく、七月に行はれてゐる。現在の祭の次第は、

権宮司は禰を、第一祓宜は伍を神前に立つ。

宮司、黒酒・白酒を献ず。

宮司、祝詞奏上。

神楽を奏す（百合の舞）。

宮司、玉串を奉りて拝礼。権宮司以下座後列拜。

参列者玉串を奉りて拝礼。

禰・伍を献ず。

神額を献ず（此の間奏楽）。

間奏 警蹕（同上）

以上で神事は終る。この神事の特長は、白酒・黒酒を入れた罇・缶の上を、三輪山に咲くユリの花で飾ること、特殊神額（熟額）を折櫃に納め、柏の葉で編んで作つた蓋をし、黒木の御櫃に載せてお供へすることである。神事の中心は、三殿にそれぞれ供へた御櫃の両隣の土器に、宮司が禰・伍から神酒を汲み出して注ぐ時である。折櫃に納めた特殊神額は、

著・御飯（蒸した野米）・塩・若布・蝶（二切）・鮎（二匹・頭

次の通りである。

修被。

宮司、由祝詞奏上。

間奏 警蹕（此の間奏楽）。

神額を供す（同上）。

此の儀、宮司・権宮司第一段（中殿）の御棚神額を供し、権宮司・第一祓宜第二段（右殿）の御棚神額を供し、第一・第二祓宜第三殿（左殿）の御棚神額を供す。



神前の神籠



特殊神輿。両端の土器には、黒酒、白酒を入れる

れ、百合の舞を舞ふ四人の巫女も亦、大神神社から来る。三輪山の日蔭の藁を頭に纏いて舞ふのである。祭の日の境内は凡てユリの花一色となり、その香は境内に満ち溢れてゐる。神事が終ると参拝者は、疫病除けの百合の花を頂いて帰る。午後は花車の町内渡御となる。ユリの花で飾られた真中に、車川子守明神三枝祭と書いた御柱を立てた花車の御遊幸は、神輿渡御と同様であることは云ふまでもない。行列の順序は、

猿田彦・奉賛会・番見・幼稚園児・各自治会長・獅子頭・太鼓・

と尾がない）・鯛・なまぶし(かつを)・かます・いか(二匹)・あはび・びわ(四箇)・大根(二枚、麻で結ぶ)・牛蒡(根本の方を五木、麻で結ぶ)・から栗とかや。

である。延喜式所載の幣物と非常に異なる。両者一致してゐるのは、あはび・かつを・海苔・塩である。この理由はどこに求めたらよいのであろう。神輿物を通して、同社の時代的変化が考へられさうである。神事は、大神神社から宣司以下の神官が来て神事の一切は行は

神職・車川譚・子供会・花車・供奉神職・巫女・侍人・会長・七乙女・観光関係者・ゆり姫・奉賛会である。さて最後に、三枝について考へてみよう。チキクサをユリに当てる説が多い。だが、ユリを當隸することの証明はむづかしい。古典に見えるサキクサは、三枝部・福草部・三枝の別・三枝部の穴太郎の王がある。

#### 三枝部

古事記、天照大神の段。次に天津日子根の命は、凡川内園造、額田部遊坐連……浦生稲寸、三枝部遊等の祖なり。

#### 三枝の別

古事記、垂仁天皇の段。此の天皇……又、且護比古多須美和能宇麻の王の女、氷羽州比売の命に娶ひまして生みませる御子……次に大津日子の命……次に大津日子の命は、山辺の別、三枝の別、稲木の別……

#### 福草部

額宗紀三年夏四月。福草部を置く。

三枝部の穴太郎の王古事記、欽明天皇の段。又、岐多志比売の命の姨、小兒比売を娶



百合の舞





町内を巡幸する花車

して生みませる御子、馬木の王……次に三枝部穴太部の王、亦の名は須壳伊白行……

これによると、三枝部の造、三枝の別、三枝部の穴太部の王の出自は各々異にしてあるが、チキクサベを置いたのは額宗天皇の御代である。これについて新撰姓氏録は、

三枝部の造、額田部湯坐と同じき祖。額宗天皇の御代に、諸氏の人等を喚集へて、みあへ賜ひき。千時、三茎の草、宮庭に生ひたるを採りて献奉れり。乃れ、姓と三枝部の造と負ひき。

と、その由来を記してある。「額田部湯坐と同じき祖」は、古事記によると天津彦根の命である。この事情はつまり、チキクサベを意味するか、否かの問題を提示する。古事記にしても、佐草と山由理草との関係はわかっても、三枝との関係は未詳である。風土記でも、出雲風土記に、「神門の郡、凡そ諸の山野にある草木は、……百合」の、一例はあるが、三枝の例はない。万葉集には、……三枝の中を寝むと、うつくしく、しが語らへば……

(五の九〇四)  
春さればま、三枝の幸くあらば後にも逢はむな恋ひそ吾妹  
(十の一八九五)

の、二例がある。前の「三枝」が「中」の杖同とするのは、新撰姓氏録の「三茎の草、宮庭に生ひたる云々」によるのである。しかしこれとても、三枝をユリに当てることにはならない。また、万葉集の「百合の花三枝」の「三枝」を「三枝」に作る元野枝本からして、「三枝」をチキクサに推定することは躊躇されるが、ユリの形を示してあるやうにも思へる。尚又、サイグサがチキクサのイ音便であることは云ふまでもないが、そのことから「佐草と佐紀と音通ふと云れき。信に古へは此の佐草草を三枝とも出で、一つ物なるべし」(記伝)へと導くことは躊躇される。結局、「三枝をさゆり花かと云は、暗推のみ」(日安補正)に終るか、又は、朱草、繪の異名、イカリ草、三枝、沈丁花、おけらなどの諸説のある所以でもある。近世以来、説辭考説の、「さき草は福草のことにて一茎の末に三枝あり。さて三あるものは、中あることわりなれば、集中に三葉の中ともいひかけたるに同じ。又、年々率川の祭に用ふる三枝花はさゆり花なるべし」といへり、さ百合は一本の末に三枝等の福草に擬へて用ふるならむと覺ゆ」による説が多い。しかし、延喜式、令の義解、新撰姓氏録の記録からしても、三枝をユリに当てることは躊躇される。結局、延喜式所載、四月の祭の頃に咲く花を、これに当てることになるが、実物は未詳と云つた方がよい。だが、大神神社(三輪山)、崇井神社、率川神社との関係を、ユリを中心にして少しく考へてみたのである。(和洋女子大学教授・文学博士)